

令和7年（2025年）の口永良部島の火山活動

福岡管区気象台

地域火山監視・警報センター

鹿児島地方気象台

口永良部島では、4月頃から6月頃にかけて主に古岳付近の浅いところを震源とする地震活動の活発化がみられましたが、7月頃から減少し、その後は少ない状態で経過しました。新岳西側山麓付近での火山性地震及び、火山性微動は観測されませんでした。

新岳及び古岳では噴煙活動や地熱域の状況には特段の変化は認められませんでした。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は100トン未満と少ない状態で経過しました。

GNSS連続観測では、2023年11月以降、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

○噴火警報・予報及び噴火警戒レベルの状況、2025年の発表履歴

2月14日11時00分	噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ
4月16日23時25分	火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引上げ
6月11日21時00分	火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引上げ
9月5日11時00分	火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引下げ
9月19日11時00分	噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokujii.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

○2025年の活動状況

・噴煙など表面現象の状況（図2～4、図5-1①、図5-2①）

口永良部島では、2020年8月30日以降、噴火は観測されていません。

監視カメラによる観測では、新岳火口では白色の噴煙が最高で火口縁上600mまで上がりました。古岳火口では白色の噴煙が最高で火口縁上80mまで上がりました。古岳では、現地調査で時折、火口縁をわずかに越える白色の噴煙を確認しましたが、監視カメラでは、2月以降、火口縁を越える噴煙は確認されませんでした。

山上と山麓で繰り返し実施した現地調査及び、3月、7月と8月に実施した上空からの観測（海上自衛隊第1航空群、九州地方整備局、第十管区海上保安本部、鹿児島県の協力による）では、新岳と古岳の火口内及びその周辺における噴煙活動や地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。古岳では、2023年6月の活動活発化以前と比べて、地熱域の拡大した状態が継続しています。

・地震や微動の発生状況（図1、図5-1②③、図5-2③、図6）

口永良部島では、4月頃から6月頃にかけて主に古岳付近の浅いところを震源とする地震活動の活発化がみられましたが、7月頃から減少し、その後は少ない状態で経過しました。地震が増加した際には振幅のやや大きな火山性地震も発生しました。

火山性地震の年回数は1,970回（2024年：4,681回）と前年から減少しました。古岳火口付近の火山性地震は1,911回（2024年：4,590回）、新岳火口付近の火山性地震は51回（2024年：86回）でした。新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。

震源が求まった火山性地震は、新岳火口及び古岳火口付近のごく浅いところから深さ1km付近に分布しました。

新岳西側山麓付近の火山性地震及び火山性微動は観測されませんでした。

・火山ガスの状況（図5-1④、図5-2②）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は100トン未満と少ない状態で経過しました。

・地殻変動の状況（図7、8）

GNSS連続観測では、2023年11月以降、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

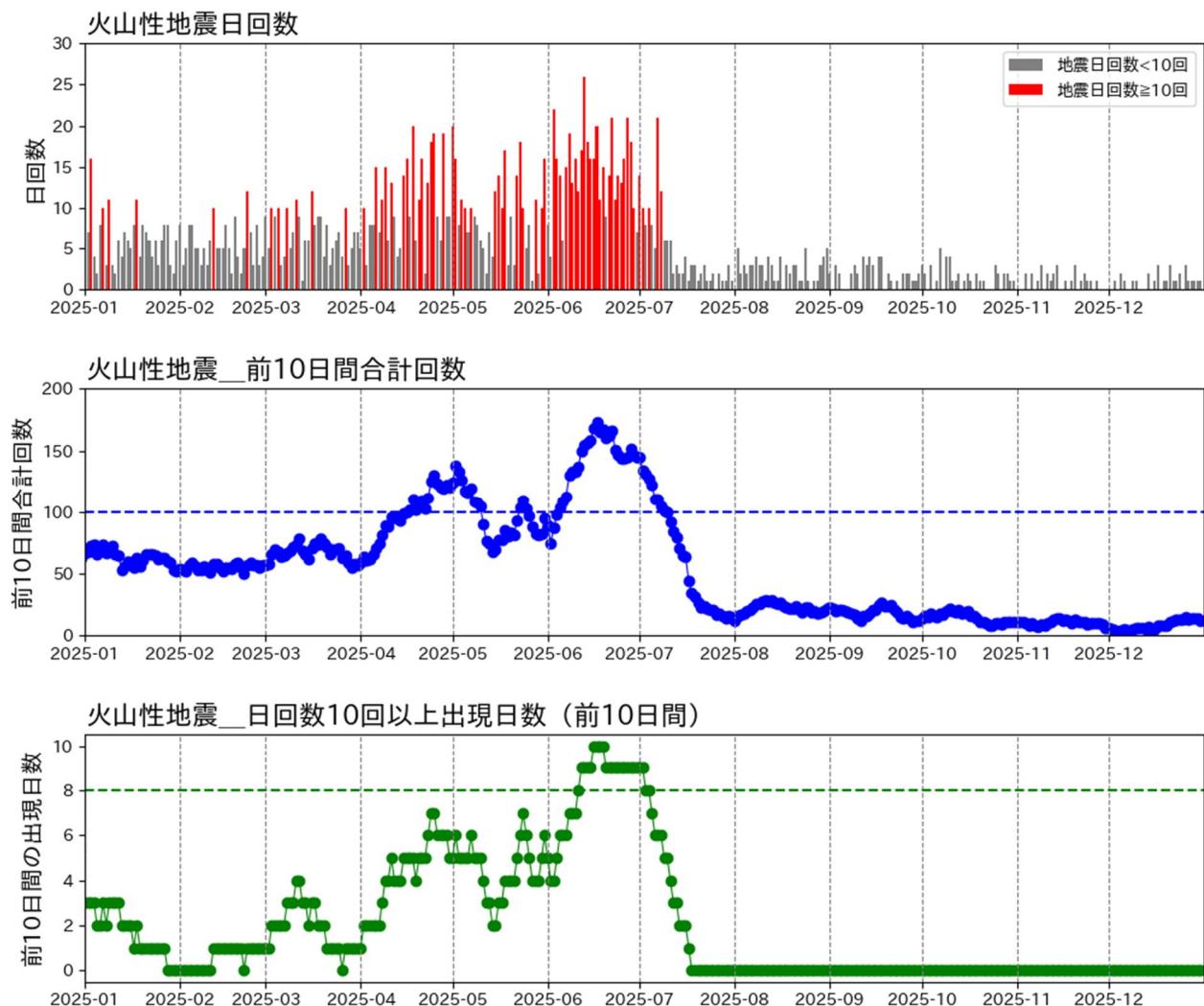


図1 口永良部島 地震活動の推移（2025年1月～12月）

4月頃から6月頃にかけて主に古岳付近の浅いところを震源とする地震活動の活発化がみられましたが、7月頃から減少し、その後は少ない状態で経過しました。

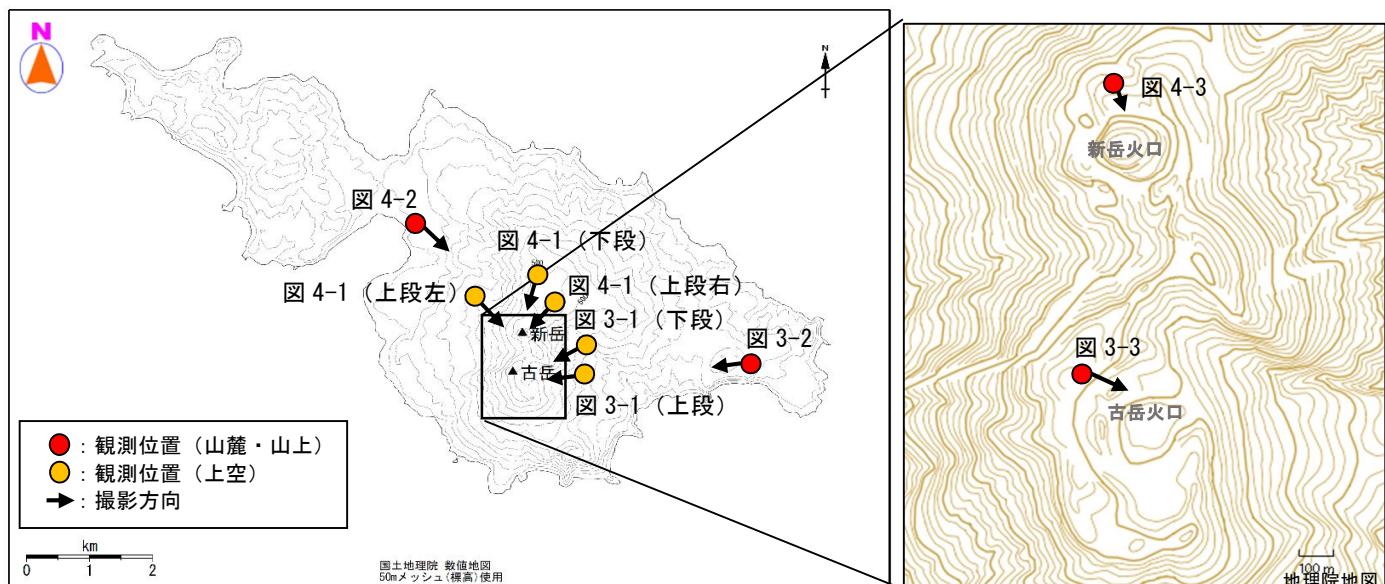


図2 口永良部島 観測位置及び撮影方向

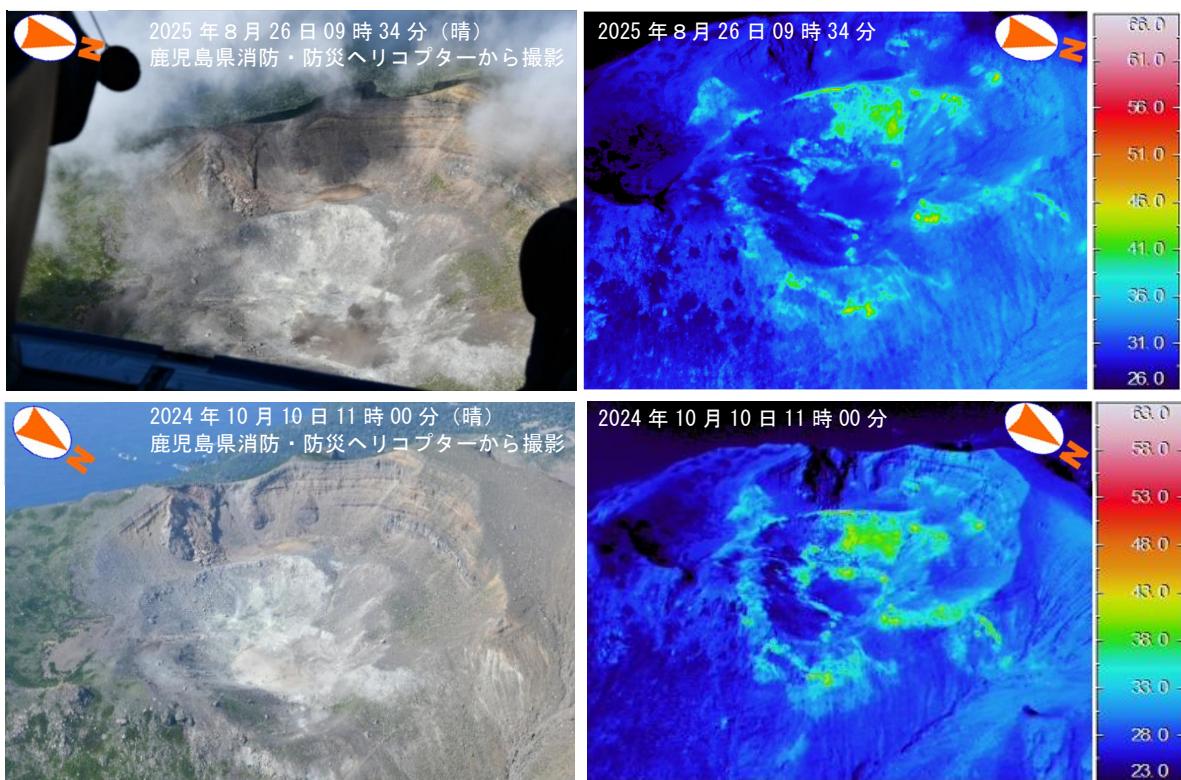


図 3-1 口永良部島 古岳火口及び周辺の状況（上空から観測）

- 8月26日に鹿児島県の協力により上空から実施した観測では、2024年10月の観測と比較して、古岳火口とその周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。
- 古岳火口内において白色の噴煙を確認しました。また、古岳火口内及びその周辺において地熱域を引き続き確認しました。

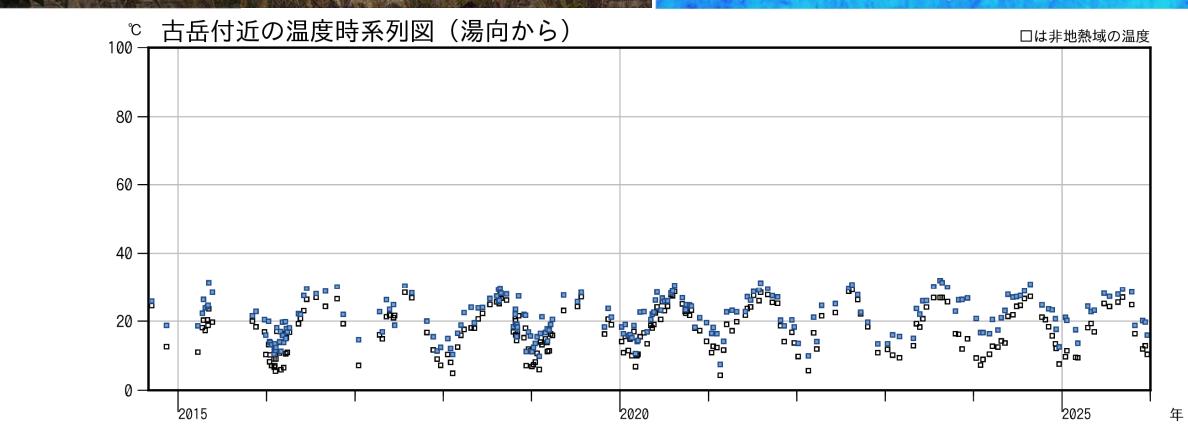
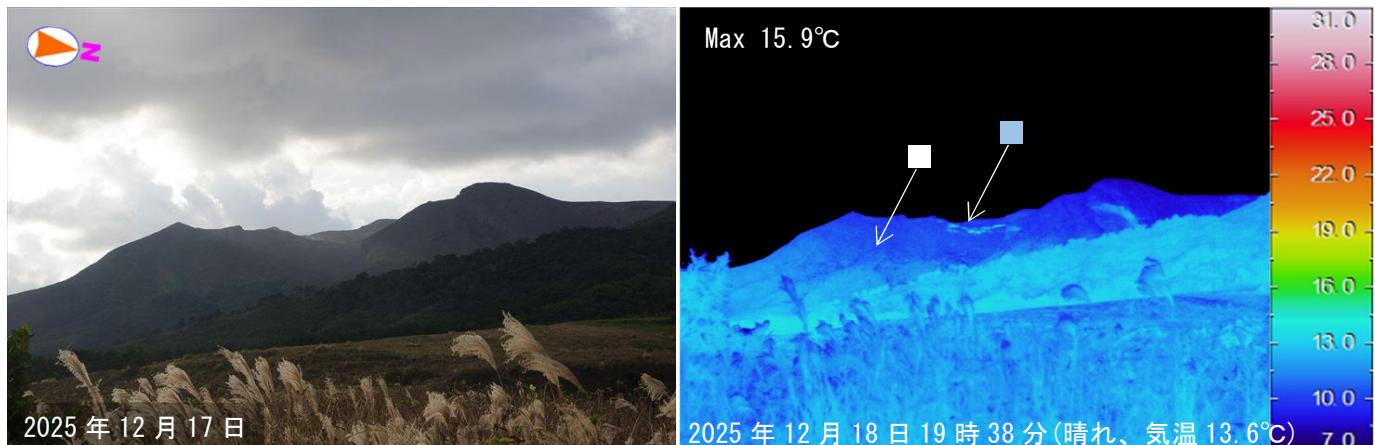


図 3-2 口永良部島 古岳周辺の地熱域の状況（湯向から観測）

- 山麓で繰り返し実施した現地調査では、古岳火口周辺において引き続き地熱域を確認しました。
- 時折、火口縁をわずかに越える白色の噴煙を確認しました。

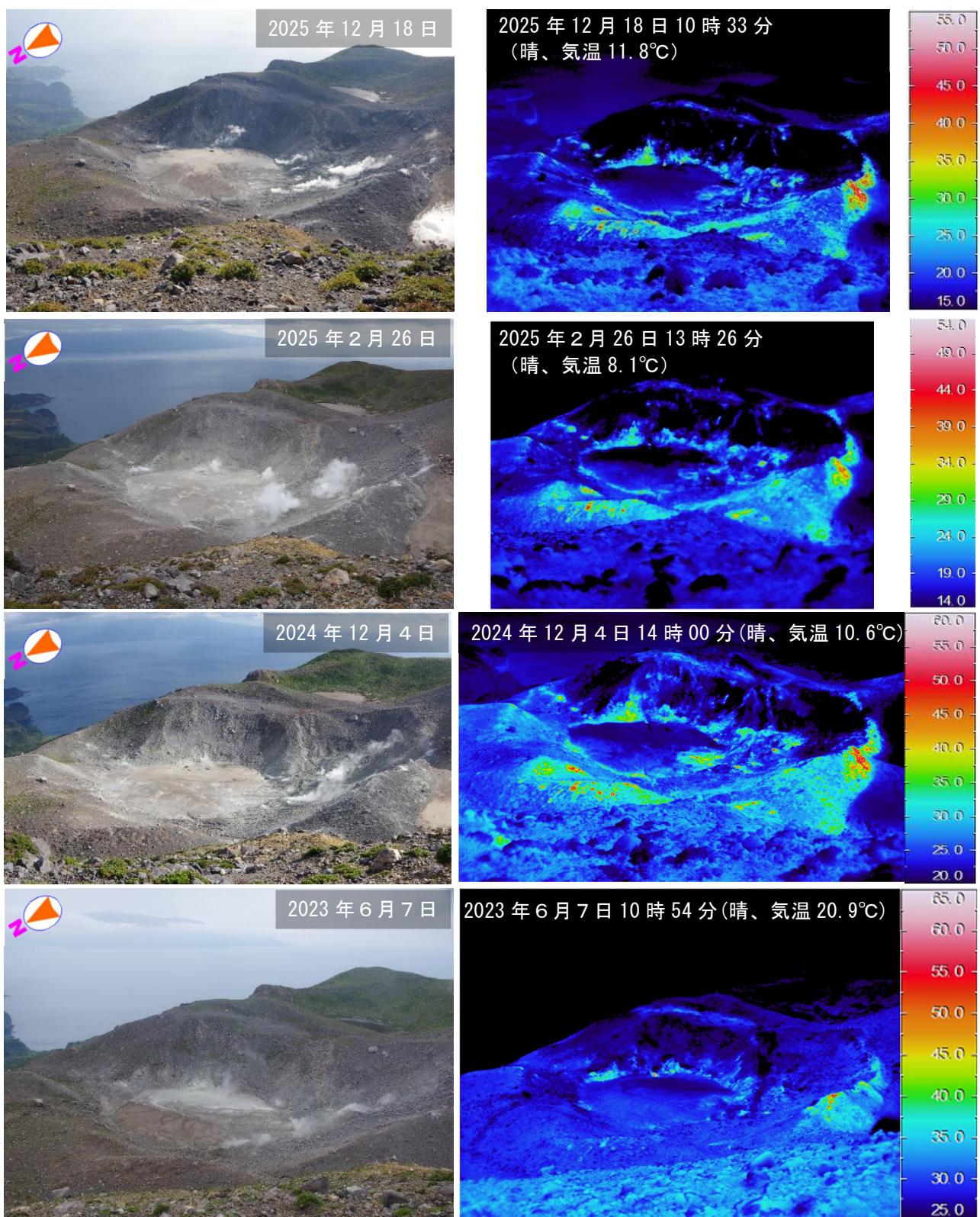


図3-3 口永良部島 古岳火口の状況（古岳山頂付近から観測）

山上で繰り返し実施した現地調査では、地熱域の温度や分布に特段の変化はみられませんでしたが、2023年6月の活動活発化以前と比べて、地熱域の拡大した状態が継続しています。

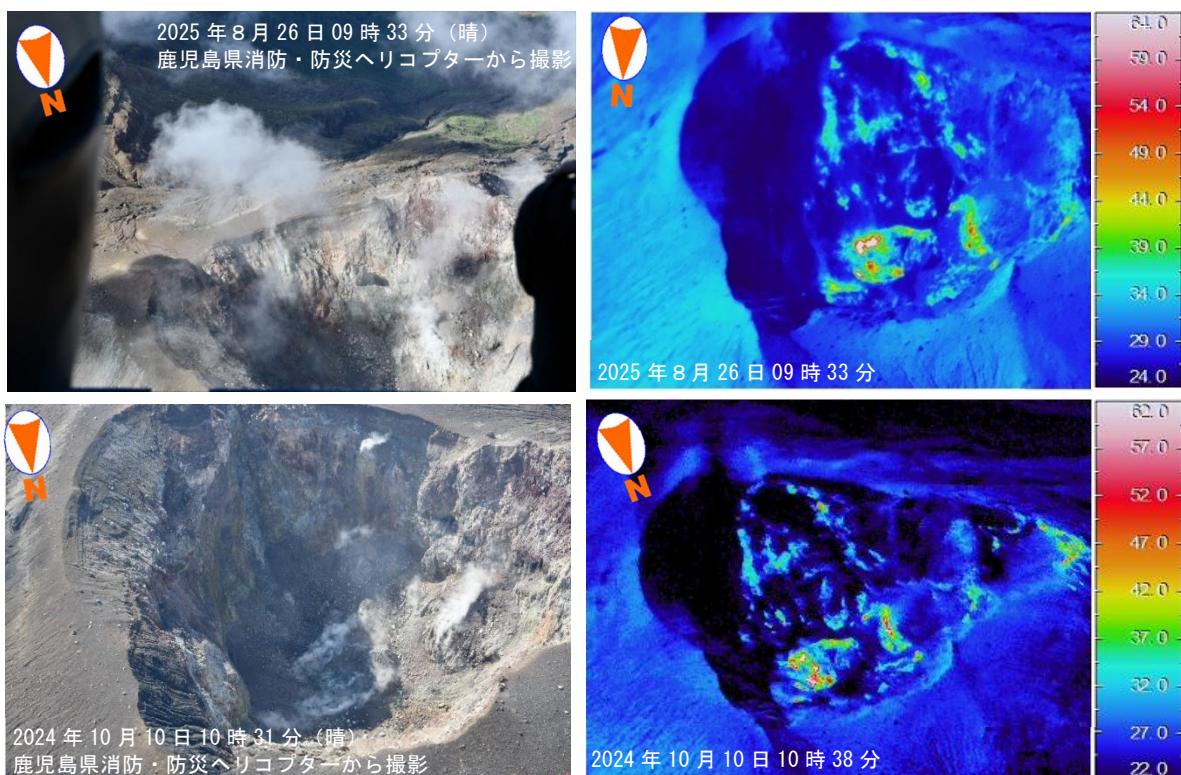


図 4-1 口永良部島 新岳火口内の状況（上空から観測）

- ・8月26日に鹿児島県の協力により上空から実施した観測では、2024年10月の観測と比較して、新岳火口とその周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。
- ・新岳火口において火口縁を超える程度の白色の噴煙を確認しました。また、新岳火口内、西側割れ目付近及びその他周辺部において地熱域を引き続き確認しました。

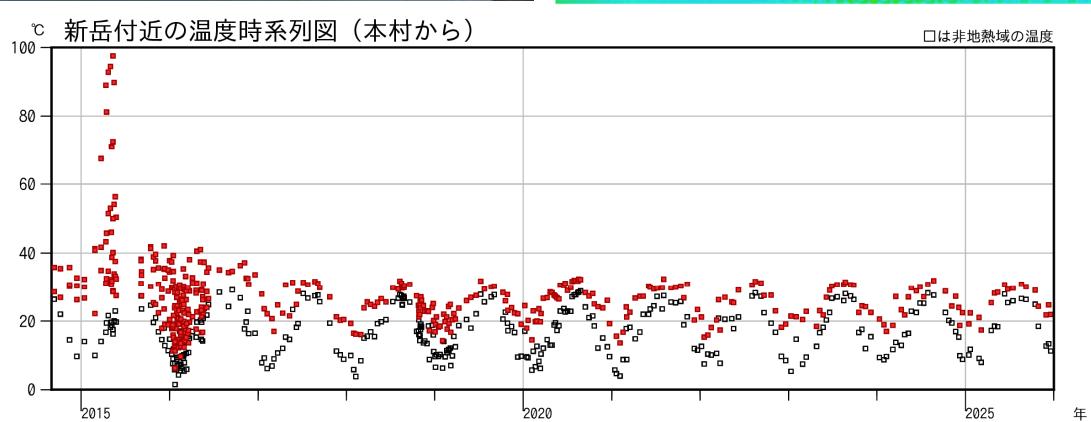
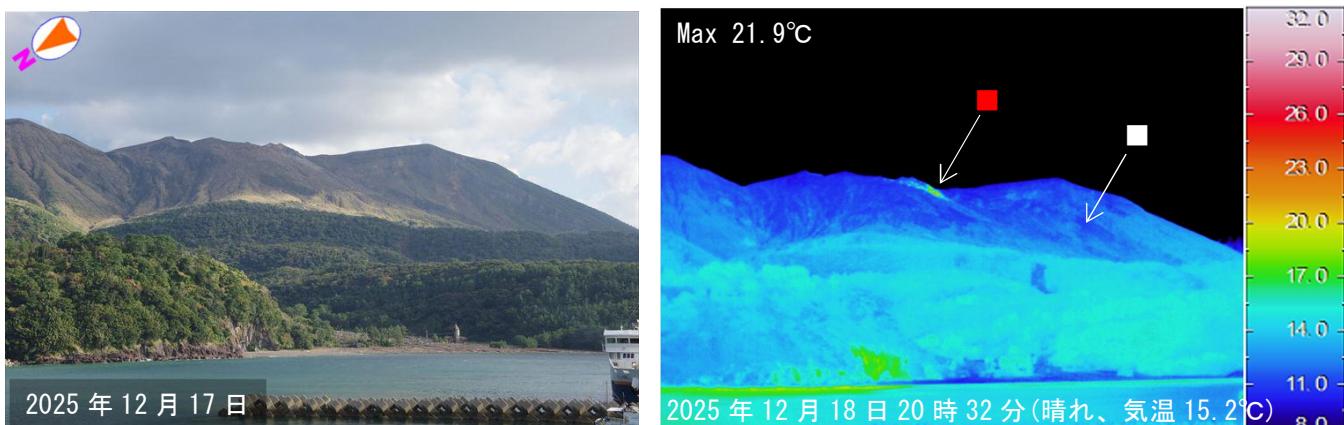


図 4-2 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

山麓で繰り返し実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域を確認しました。

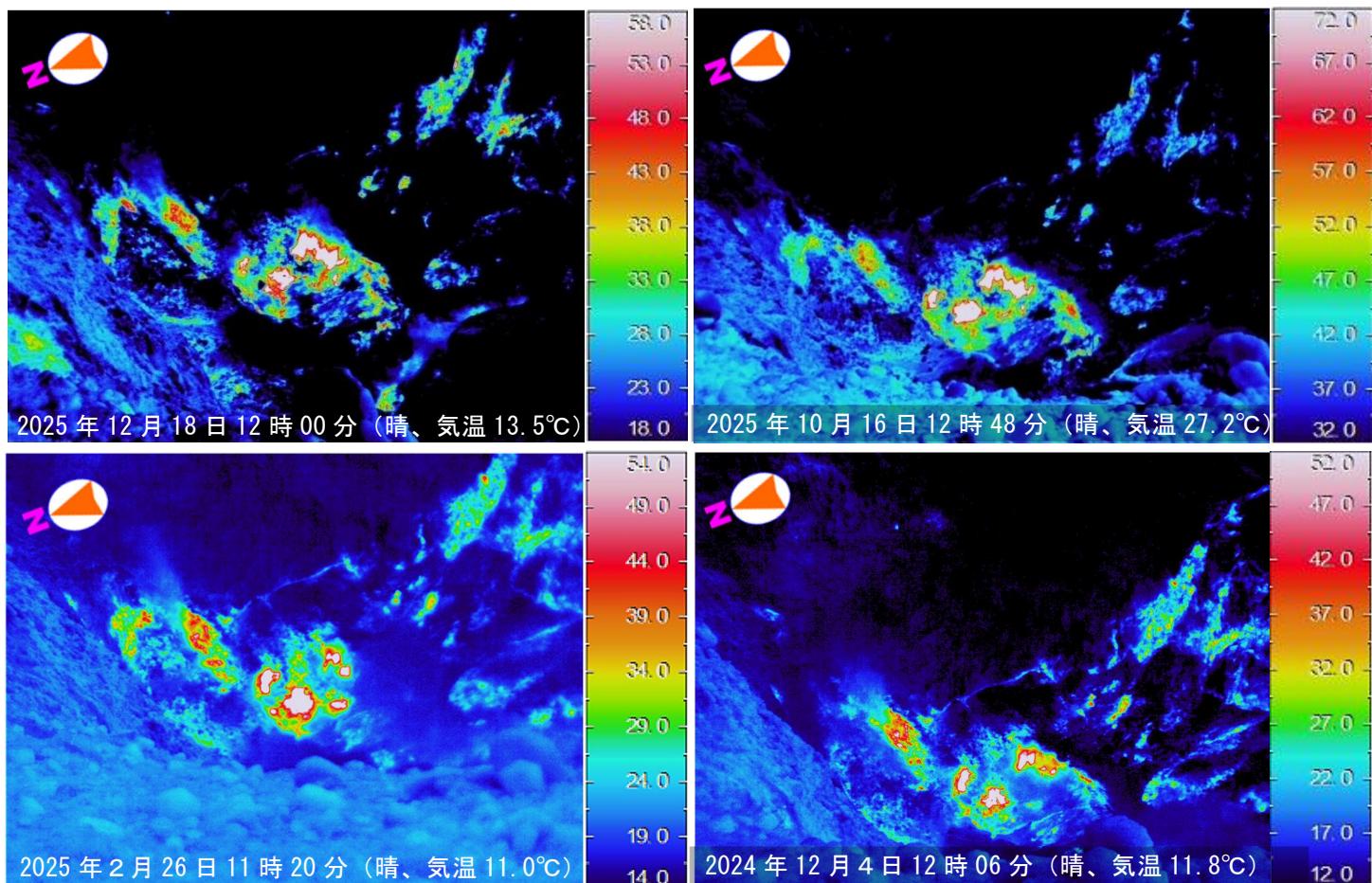


図4-3 口永良部島 新岳火口内の状況（新岳火口縁北西側から撮影）

山上で繰り返し実施した現地調査では、新岳火口内及びその周辺で地熱域を観測しました。また火口内に留まる程度の噴煙を確認しました。地熱域の分布や温度及び噴煙活動に特段の変化は認められませんでした。

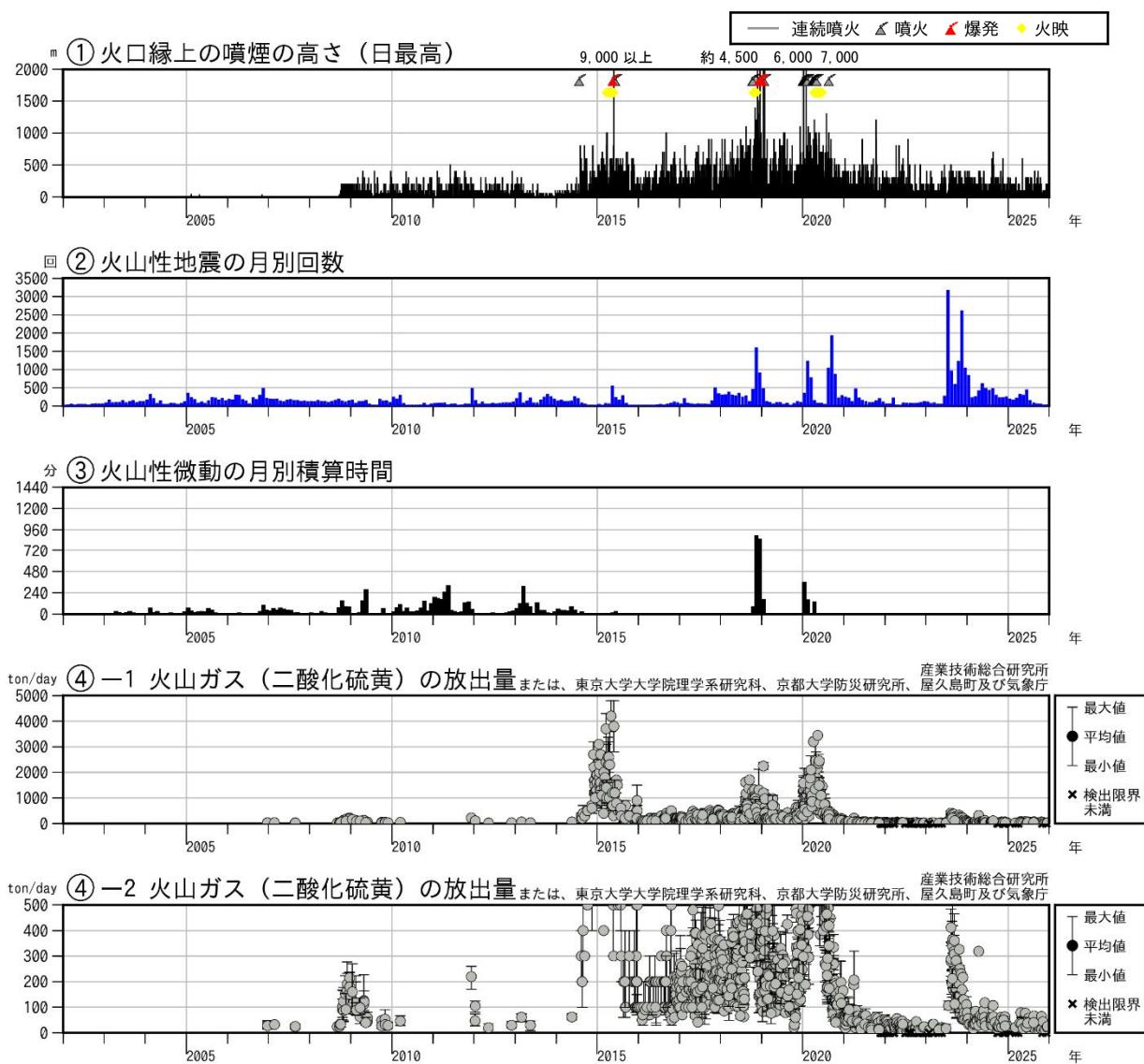


図 5-1 口永良部島 火山活動経過図 (2002 年 1 月～2025 年 12 月 31 日)

火山性地震及び火山性微動は、観測点の稼働状況により、「野池山3（上下動 $8.0 \mu\text{m/s}$ ）」「FDKL（京）（上下動 $6.0 \mu\text{m/s}$ ）」「新岳西山麓（上下動 $3.0 \mu\text{m/s}$ ）」「新岳北東山麓（上下動 $1.0 \mu\text{m/s}$ ）」「古岳北（上下動 $3.0 \mu\text{m/s}$ ）」「古岳南山麓（上下動 $4.0 \mu\text{m/s}$ ）」のいずれかの基準を満たすものを計数しています。

2017年12月13日から2019年1月16日までは古岳北上下動成分の計数基準を $6.0 \mu\text{m/s}$ としています。

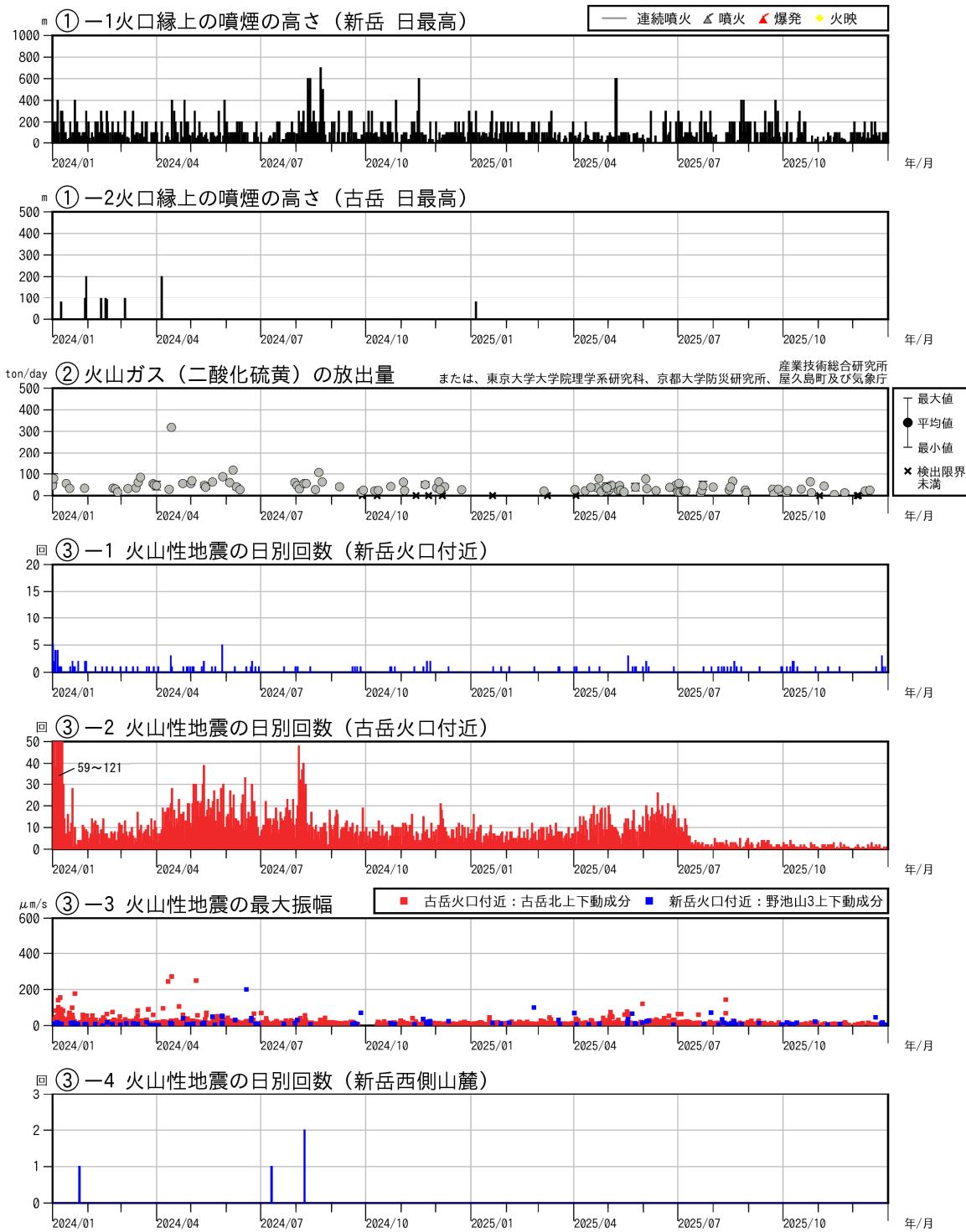


図 5-2 口永良部島 最近の火山活動経過図（2024 年 1 月～2025 年 12 月）

<2025年の状況>

- ・2020年8月30日以降、噴火は観測されていません。
- ・新岳火口では白色の噴煙が最高で火口縁上600mまで上がりました。古岳火口では白色の噴煙が最高で火口縁上80mまで上がりました。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は100トン未満と少ない状態で経過しました。
- ・火山性地震の年回数は1,970回（2024年：4,681回）と前年から減少しました。古岳火口付近の火山性地震は1,911回（2024年：4,590回）、新岳火口付近の火山性地震は51回（2024年：86回）でした。新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。
- ・4月頃から6月頃にかけて主に古岳付近の浅いところを震源とする地震活動の活発化がみられました。地震が増加した際には振幅のやや大きな火山性地震も発生しました。7月頃から地震回数は減少し、その後は少ない状態で経過しました。

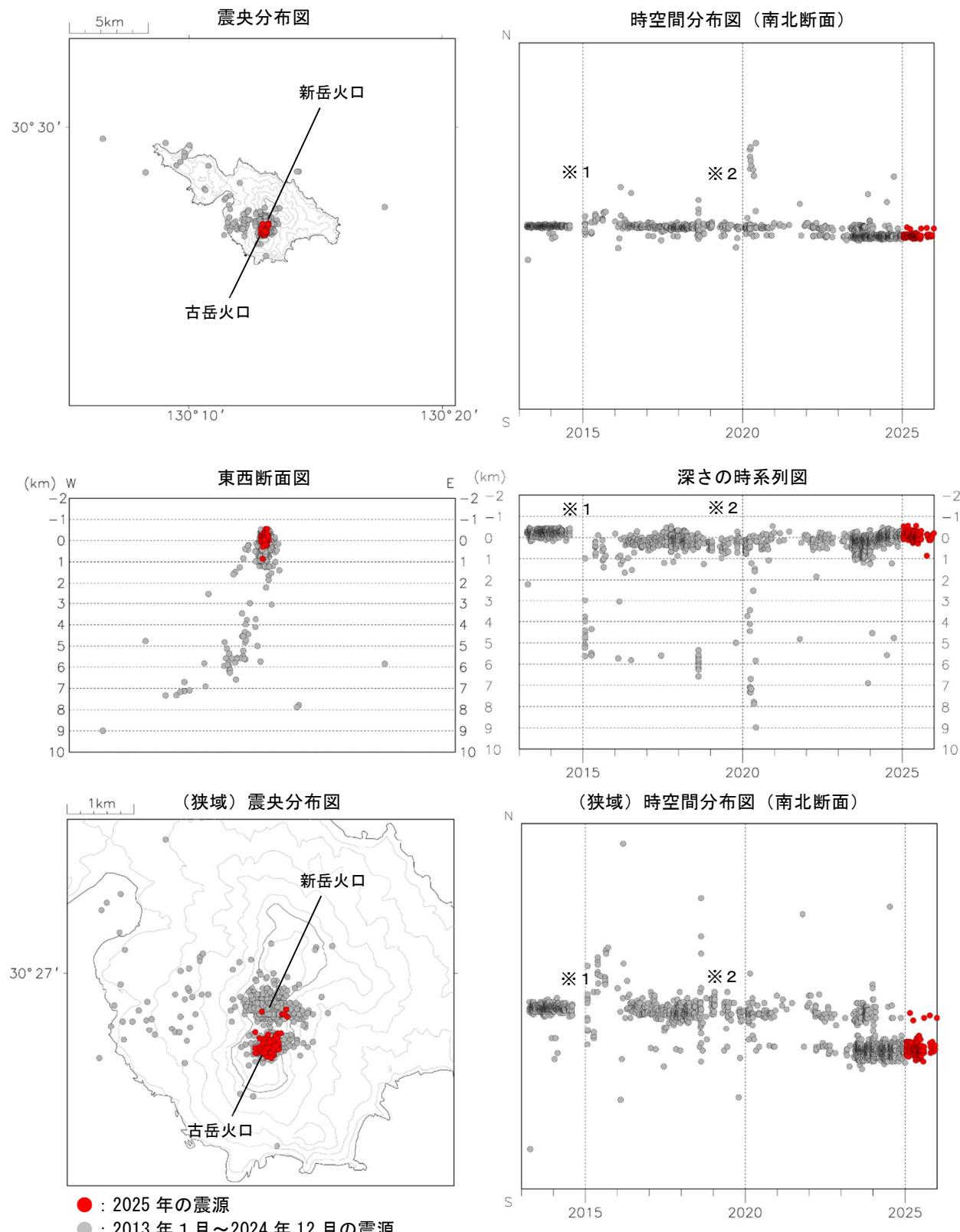


図6 口永良部島 震源分布図（2013年1月～2025年12月）

<2025年の状況>

震源が求まった火山性地震は、新岳火口及び古岳火口付近のごく浅いところから深さ 1 km 付近に分布しました。

※1 2014 年 8 月 3 日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から 2016 年 5 月 31 日までは検知力や震源の精度が低下しています。

※2 2019 年 1 月 17 日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から 2019 年 10 月 8 日までは検知力や震源の精度が低下しています。

その他の期間においても観測点の障害等により、検知力や震源の精度が低下する場合があります。

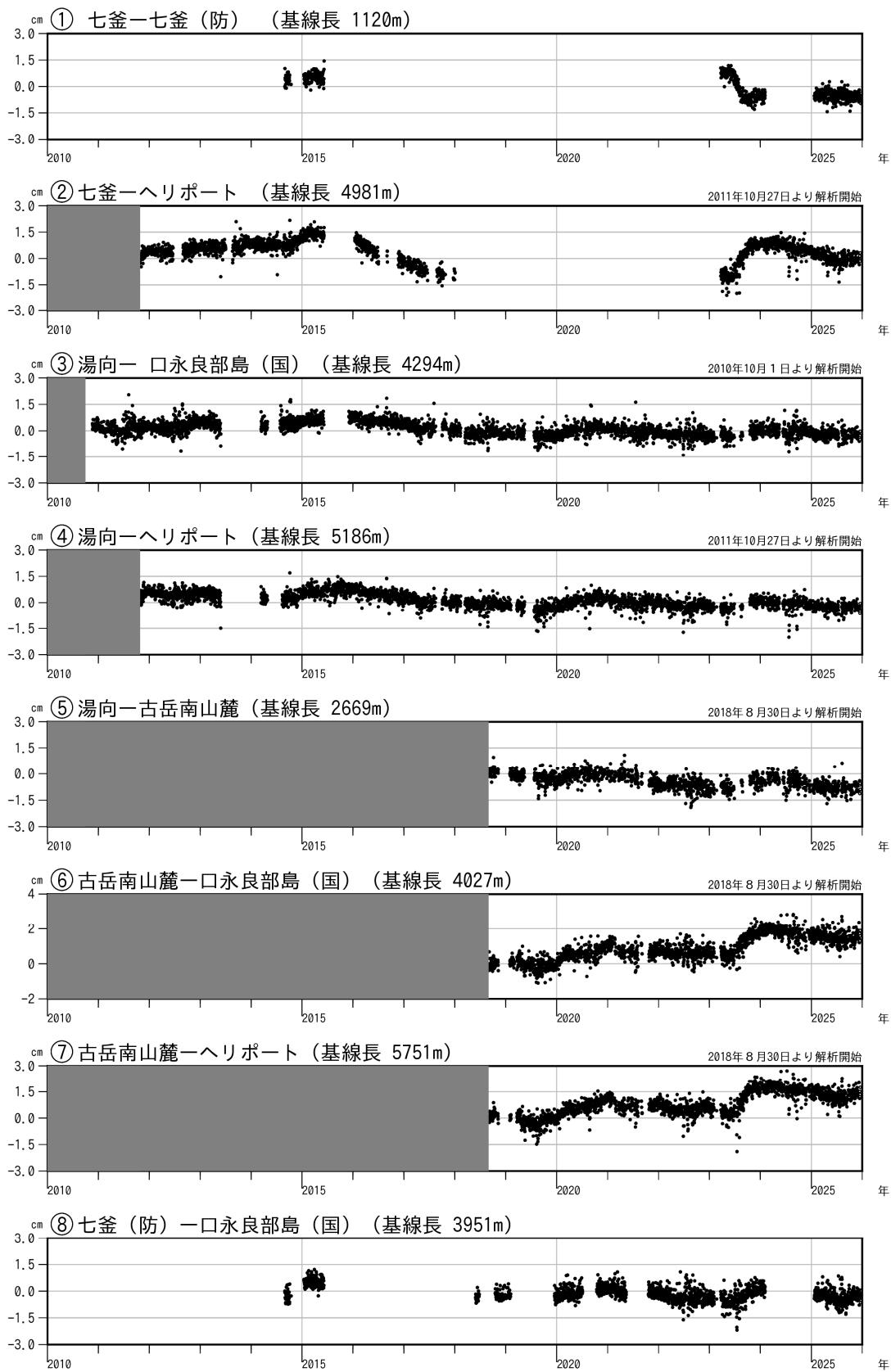


図7 口永良部島 GNSS連続観測による基線長変化（2010年1月～2025年12月）

GNSS連続観測では、2023年11月以降、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

これらの基線は図8の①～⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

2023年3月23日の観測点修繕工事（七釜観測点）に伴うステップを補正しています。

（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

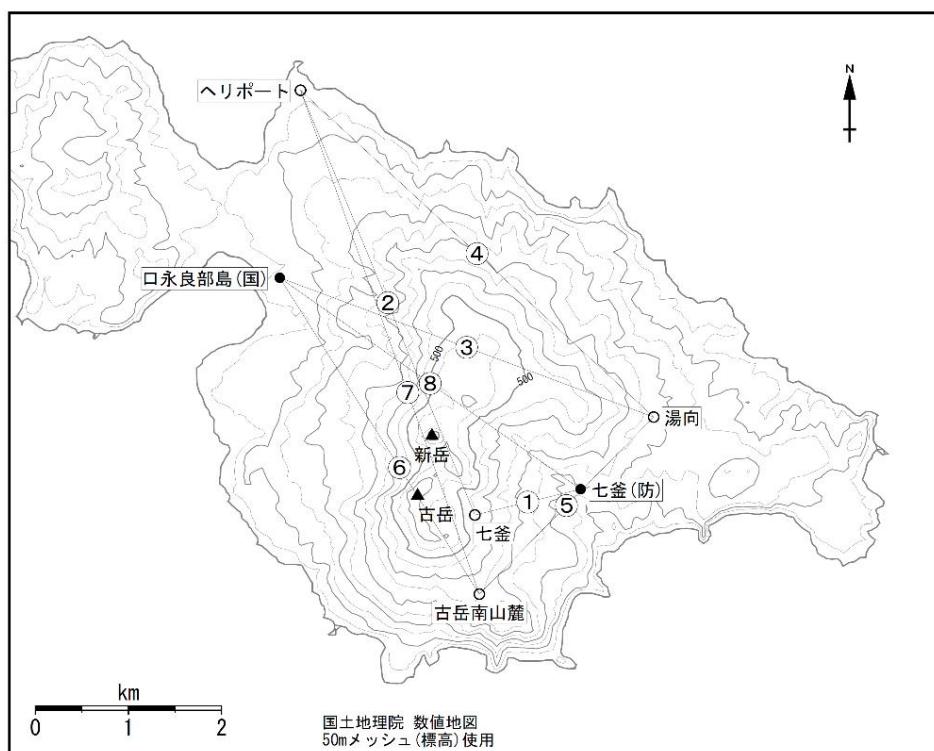


図8 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所

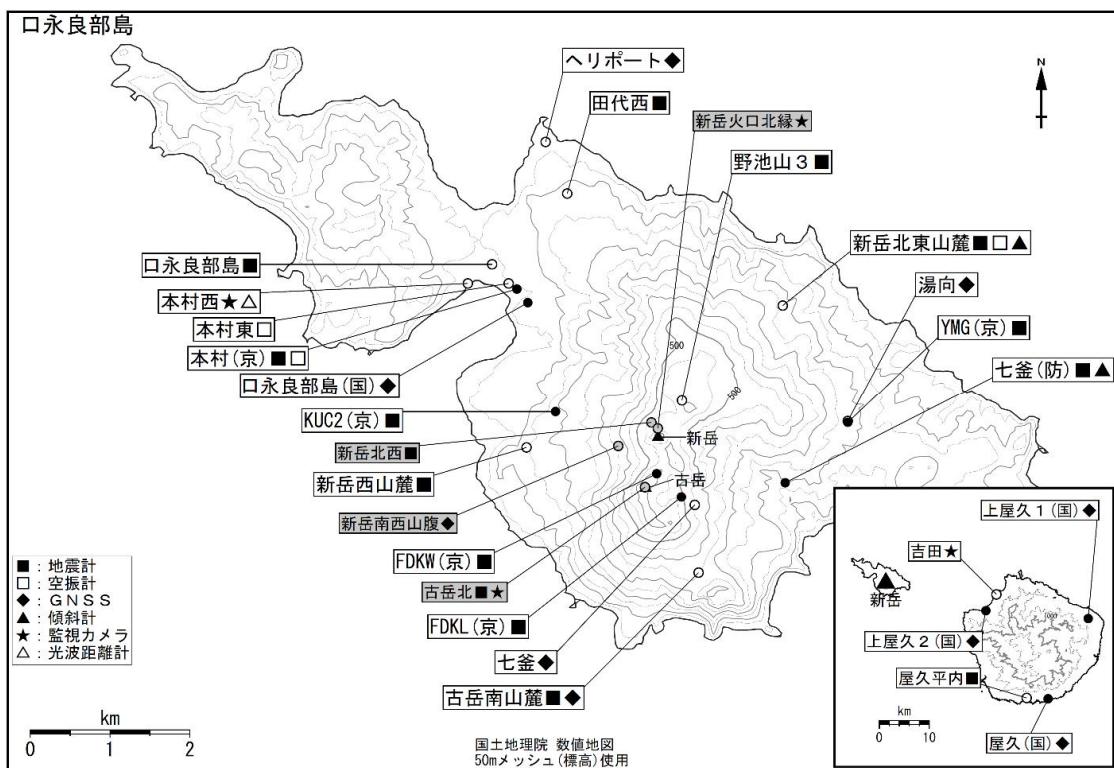


図9 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(京)：京都大学、(防)：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。

表1 口永良部島 気象庁（火山）観測点一覧（緯度・経度は世界測地系）

測器種類	観測点名	位置			設置高 (m)	観測開始 日	備 考
		緯度 (° ′)	経度 (° ′)	標高 (m)			
地震計	新岳北東山麓	30° 27. 66'	130° 13. 89'	232	-98	2010. 8. 2	
	新岳北西	30° 26. 86'	130° 12. 86'	566	0	1999. 9. 11	
	古岳北	30° 26. 42'	130° 12. 81'	645	0	2004. 2. 3	臨時観測点
	新岳西山麓	30° 26. 69'	130° 11. 88'	149	0	2004. 2. 21	
	古岳南山麓	30° 25. 84'	130° 13. 23'	363	0	2015. 2. 25	
	口永良部島	30° 27. 94'	130° 11. 62'	20	0	1994. 9. 28	
	野池山3	30° 27. 01'	130° 13. 10'	582	0	2016. 6. 1	臨時観測点
	田代西	30° 28. 42'	130° 12. 20'	132	0	2017. 3. 23	
空振計	新岳北東山麓	30° 27. 66'	130° 13. 89'	232	2	2010. 8. 2	
	本村東	30° 27. 81'	130° 11. 74'	17	2	2010. 3. 25	
GNSS	新岳南西山腹	30° 26. 70'	130° 12. 60'	350	1	2006. 12. 10	
	七釜	30° 26. 30'	130° 13. 20'	435	1	2006. 12. 10	
	湯向	30° 26. 87'	130° 14. 40'	236	3	2010. 10. 1	
	ヘリポート	30° 28. 77'	130° 12. 03'	28	2	2011. 10. 27	
	古岳南山麓	30° 25. 84'	130° 13. 23'	363	1. 25	2018. 8. 30	臨時観測点
傾斜計	新岳北東山麓	30° 27. 66'	130° 13. 89'	232	-98	2011. 4. 1	
光波距離計	本村西	30° 27. 81'	130° 11. 42'	4	1	2014. 9. 24	
監視カメラ	本村西	30° 27. 81'	130° 11. 42'	4	8	2004. 3. 10	
	吉田	30° 25. 52'	130° 26. 80'	54	2	2018. 8. 30	臨時観測点
	新岳火口北縁	30° 26. 82'	130° 12. 91'	580	1	2010. 7	
	古岳北	30° 26. 42'	130° 12. 81'	642	1	2017. 3. 12	臨時観測点